日本医史学雑誌　第54巻第3号（2008）　275–280

台湾の医学に影響を与えた日本人
――耳鼻咽喉科の場合――

王　敏　東

銘傳大学応用日本語学科

受付：平成20年7月14日／受理：平成20年7月18日

1. はじめに

日清戦争後，下関条約の締結（1895）により，台湾は日本におけるはじめての植民地となった．日本政府は台湾に進駐するとすぐに医療関係の仕事に積極的に力を注いだ．日本人が台湾に持ち込んだのは，当時すでに日本で相当発展していた西洋医学である．そのような医学が台湾に与えた影響は広くて深いものである．

本稿は台湾において日本統治時期（1895～1945，以下「日治時期」）以来刊行されてきた資料と同じ時期の日本の資料を中心に，台湾の耳鼻咽喉科に影響を与えた人々の様子を再現しようと試みる．

台湾における耳鼻咽喉科の母体に当たる日本の耳鼻咽喉科は1892年にドイツより帰国した金杉英五郎の診療が嚆矢とされている．同じくドイツ留学していた岡田和一郎によって1900年に耳鼻咽喉科学講座が東京帝国大学に開設された[1]．それに対して，主に日本人によって構築された台湾の医学体系では，1902年に『台湾医学会雑誌』の創刊や，台湾における初の耳鼻咽喉科の創立が，重要事項としてあげられる．このように，台湾における耳鼻咽喉科は日本の耳鼻咽喉科と密接に関連しているが，日本の耳鼻咽喉科のホームページにその歴史・沿革などが詳しく紹介されているものの，ほぼ同じ時期に発足した台湾の耳鼻咽喉科については一切触れられていない．また，日本人によって作られた，台湾における医療体系の先駆となった台湾大学[2]（医学部耳鼻咽喉科及び付属病院）耳鼻咽喉科[3]のホームページでは初代主任[4]まで遡って記載されてはいるが，日本統治時期の事情を含め，情報不足や間違いが見られた[5]．なお，『台湾大学医学院百年院史』（1997～1999）や『台大耳鼻喉科五十週年紀念』（1989）など台湾大学医学部所属の方々が編集した書物にも戦前に関する記載が少なく，専ら戦後に重点が置かれている．

以上の事情より，本稿は台湾の日治時期における耳鼻咽喉科を中心に，その時期台湾で活躍していた人々の姿，及び台湾に与えた影響について検討することにした．更にその結果を，日本における耳鼻咽喉科全体の流れの中に位置付けることをも試みようと考える．

2. 資料に見る日治時期台湾の耳鼻咽喉科主任

まず，日治時期の台湾における医療状況を概観すると，次のようになる．1895年に，台湾病院（現在台湾大学付属病院の前身）が運営を始め，1898年に台湾総督府台北医院と改称された．一方，1902年に台湾医学会が成立し，学会誌が創刊された[6]．他方，医学教育の開始は1899年の台湾総督府医学校で，1919年に台湾総督府医学専門学校，1922年に更に台湾総督府台北医学専門学校と改称された．また，台北帝国大学は1928年に設立されたが，医学部は1935年に開設された[7]．翌1936年には台湾総督府台北医学専門学校の校地を使用するようになり，1938年に帝大自身の付属病院が成立するという過程を辿った[8]．

また，台湾大学耳鼻咽喉科のホームページに見

られるその歴史は次の通りである．1902年に耳鼻咽喉科は外科から独立した．1905年に竣工された赤十字病院が医学校の教学医院となった．1918年に台湾総督府医学校は総督府医学校専門部を併設し，1922年に台湾総督府台北医学専門学校と改称され，1936年にまた台北帝国大学付属医学専門部と改称した．この医専の方で山下憲治助教授が赤十字病院の責任をとり，山下教室を形成している．一方，台北帝国大学が1936年にはじめて医学部が設けられ，1938年に台北帝大医学部耳鼻咽喉科教室が正式に成立し，赤十字病院の上村親一郎を主任として迎えた．

このような歴史の流れの中で，台湾の耳鼻咽喉科に影響を与えた日本人と言えば，まず考えられるのが台湾初の耳鼻咽喉科の歴代主任であろう[9]．台湾大学耳鼻咽喉科のホームページに提示されている該当科の日治時期の歴代主任は岸一太，柏原省私，細谷太太，杉山栄，加納芳次[10]，上村親一郎，山下憲治の七人である（そのうちの「細谷太太」は「細谷雄太」の間違いと考えられる）．

以下，各主任について小節を分けて述べる．

2.1. 岸一太

1902年2月1日の『台湾日日新報』（官報）に「台北医院耳鼻咽喉科の開始　台北医院で耳鼻咽喉科を新設せん為めドクトル岸一太氏を傭聘したる由……」とあり，初代主任岸の着任が報じられている．岸は台湾地方病調査会臨時委員も命ぜられた[11]．次の年1月に岸夫人のミセス，シエルマ氏が船で台湾に来たことも同紙に報じられた．岸は「赴任以来本島の風土病たる甲状の腺腫の病理并に治療法に就きて専ら研究中なるが……」と述べたように，色々なところで調査を行なっている[12]．その結果は講演や研究報告の形で発表された[13]うえ，博士論文の一部にも入れられている[14]．

岸の任期終了について，台湾大学耳鼻咽喉科のホームページには「定年」とあるが，1906年11月20日の『漢文台湾日日新報』に「台北医院医長岸一太氏被休職」，1907年2月3日に「休職医院医長医学博士岸一太氏此次免任台湾地方病及伝染病調査会委員」[13]と記載されている．また，1907年9月7日の『台湾日日新報』にある「岸医学博士 休職総督府医院医長医学博士岸一太氏は去月二十三日関東都督府技師に任じ……」という報道で，岸がその後日本内地に戻ったことが分かる．1909年3月13日の『台湾日日新報』に更に「今回都督府及満鉄会社を辞し東京築地……に開業したる由」と報じられている．

しかし，1917年の『太陽』14号には「医学博士岸一太氏は王子新飛行場完成に近きたる故本職の医業より引退披露をなす」とある．また，戦前の『読売新聞』を見ると，台湾に来る前の1902年以前のことについては一切取扱われていないのに対して，1913～1934年の間はほとんど毎年のように報道されていた．内容は飛行発動機の発明の他，色々な裁判，宗教との関係，精神病の罹患鑑定などで，波乱万丈の一生だったことがうかがえる．と同時に，後半生は台湾や医学とは縁が遠くなっていたことも読み取れる．岸の永眠について『台湾日日新報』（1937年5月10日）に「脳溢血に肺炎を併発し八日午後五時逝去した，享年64，氏は岡山の出身，台湾医学校を勤めたことあり，嘗て霊媒の存在を主張したが最近は事業の失敗から蟄居してゐた」と該当新聞が岸を取上げた最後の記事として残った[16]．

岸の著書については，日本の各図書館に1913～1925年に出版された『下北砂鐵製錬ニ関スル研究』（1913），『東京の工学的地質研究』（1925）などの工学関係のもの，1928～1934年に明道会が中心に出した『神霊と稲荷の本体』（1928），『教育と神霊学』（1934）などが所蔵されている．また，現在台湾大学に所蔵されている書物のうち作者が「岸一太」となっているものは『最新鋪道学』（1922（再版）），『神道の批判』（1929），『眞の日本精神』（1934（四版））などであり，医学関係のものは見当たらない．

このような著書を見ても，内地に戻った後は医学から離れてしまったことがうかがえる．が，『台湾日日新報』には日治時期の耳鼻咽喉科主任7人の中で，最も多く報じられている．

2.2. 柏原省私

岸に続いて二代目の主任として来台したのは柏原省私である．その任期については，1907年4月16日の『台湾日日新報』に「耳鼻咽喉科医長には医学士柏原省私氏不日着任する」，同年5月1日の『台湾日日新報』に「柏原省私氏 新任台北医院医長同氏は廿七日来任」，1911年8月30日の『台湾日日新報』に「柏原省私氏（休職医院医長）休職満期となる」とあるように，1907～1911年であることが分かる．柏原については，台湾滞在期間中に『台湾医学会雑誌』に論文を発表した他，聾唖者に五十音を教え，聾唖教育に携わるようになった（『漢文台湾日日新報』1908年5月20日，『台湾日日新報』1909年4月16日）ことや，静岡県郷友会の幹事をした（『台湾日日新報』1909年3月24日）というような逸話が残されている．

一方，柏原が主任であった時期の日本内地の耳鼻咽喉科は，「学術発表の活発化，専門図書の発刊など，学問的気運向上に至った」といわれる大正・昭和初期[17]に当たる．柏原省私の名も，日本耳鼻咽喉科学会のホームページで見られる「大正時代に刊行された斯科領域専門図書の著者」に含まれている．ただし，管見の限り日本の各図書館にも台湾の各図書館にも作者が柏原省私となっている蔵書が見当たらない．『台湾医学会雑誌』には柏原省私の論著が六編載せられているが，いずれも大正以前のものである．

2.3. 細谷雄太

俳人でもある細谷雄太が台湾総督府医学専門学校教授兼台北医院院長に命じられたのは1912年または1920年とされており[18]，『台湾医学会雑誌』や『台湾日日新報』には1912年以降その名が見られる．1913年1月30の『台湾日日新報』の「医校考試」という記事に「……総督府医学校募集生徒……試官為該校教授吉田恒蔵．細谷雄太両氏．……」とある他，1914年6月11日の『台湾日日新報』に「細谷雄太氏（台北医院医官）十日帰台」，1915年4月29日の細谷が夫人と同行して30日に基隆着の船に乗っていたことなどが見られる．しかし1917年に細谷は文部省在外研究員として，スイス，イタリアへ留学した後の履歴には台湾にかかわるものは少ない[19]．

細谷は『台湾医学会雑誌』に13本の論著を発表し，『台湾日日新報』でも15の記事に取上げられている．また，1909年～1942年の間，彼は数多くの著書を完成した．このうち，赤松純一・細谷雄太（1910）『一般医学及耳鼻咽喉科学』（吐鳳堂）は，現在台湾大学図書館には所蔵されているが日本にはないようだ．

2.4. 杉山栄

細谷の続きとして主任を務めたのは杉山栄だと思われるが，具体的な任期は不明である．細谷が文部省在外研究員として，スイス，イタリアへ留学したと同時に台湾での仕事を辞めたとしたら，杉山が次期主任になったのは1917年からだと考えられる．

『台湾医学会雑誌』に作者が「杉山栄」とされているものが10編（1913～1921年）ある[20]のに対して，『台湾日日新報』に「杉山栄」という名前が見られるのは1913年のと1918年の2本のみである．後者は「台北医院医官補杉山栄氏の令弟」に関するもので，「日本歯科出身の開業医は台北にては同氏が嚆矢なりと」との記事であった．一方，杉山栄を著者とする医学関係の本は日本にも台湾にも見当たらない．また，戦前の『読売新聞』に見られる「杉山栄」に関する記事にもいずれも医学関係または台湾の気配がない．

2.5. 加納芳次

加納は日治時期の歴代主任のうち最も情報が少ない主任である．『台湾医学会雑誌』に4本の発表（1925～1932年）が残されているのみで，このうち「台北医院耳鼻咽喉科」と所属が明記されているのは1932年の1本だけである．加納の主任の任期については，前期の杉山の任期終了の時間が明らかにされていないので，開始年は判明できない．次期主任の上村親一郎が台北帝大医学部耳鼻喉科主任（上村教室）となったのが1938年であるため（詳細は後述），加納の任期が1938年以前に終わっていることは分かる．

表1

名前（生没年）①出身地②医学教育を受けたところ③最終学歴④台湾以外医学関係の仕事に携わった場所		岸　一太（1875～1937）①岡山②岡山／ドイツ③医学博士（1906）④東京（開業）	柏原省私①静岡（?）	細谷雄太（1882～1950）①山形②東京③医学博士④千葉／埼玉	杉山　栄	加納芳次	上村親一郎（1890～1950）②九州③医学博士（1928）	山下憲治（1905～?）②京都③医学博士
台湾での履歴		耳鼻咽喉科部長 1902～1906	耳鼻咽喉科医長 1907～1911	台湾総督府医院医長兼台湾総督府医学専門学校教授 1912～			台北医学専門学校・医専部赤十字病院 1923～；台北帝大医学部耳鼻喉科主任（上村教室）1938～1945	台湾總督府台北医院耳鼻喉咽科医長 1936～・（医専）赤十字病院耳鼻喉科（山下教室）1936～1945
台湾医学会雑誌（1902～1945年）		1902～1906（17本）	1907～1911（6本）	1912～1926（13本）	1913～1921（10本）	1925～1932（4本）	1925～1944（30本）	1934～1944（35本）
台湾日日新報（1898～1944年）	日本語版	1902～1937（39記事）	1907～1911（7記事）	1912～1926（15記事）	1913～1918（2記事）	—	1925～1938（8記事）	1936～1940（2記事）
	漢文版	1906～1911（6記事）	1907～1908（8記事）	—	—	—	—	—

2.6. 上村親一郎

上村親一郎の台北帝大医学部耳鼻喉科主任（上村教室）着任，及びそれに関することは1938年3月23日の『台湾日日新報』に「医学部の新陣容六つの講座を新設」というタイトルの記事に掲載されている．上村はそれ以前，1923年にすでに台北医学専門学校教授として台湾に来ており[21]，1928年に九州大学医学部で医学博士号を取得し[22]，論文を多く『台湾医学会雑誌』で発表され[23]，台北帝国大学付属病院院長にもなっていた[24]．任期中日本へ戻ったり，海外へ行ったりもしていた[25]．論文は多いが，著書は残されていないようだ．

台湾大学耳鼻咽喉科の医局には，今でも日治時期以来の主治医の系譜が壁に貼ってある．各主治医の師弟関係は上村まで遡られている．そのためか，上村の生没年や，出身校など，台湾大学耳鼻咽喉科のホームページでは他の主任より多くの情報が提示されている．上村の人柄や医療態度などについても，上村の台湾人弟子である杜詩綿[26]らによるの思い出等が残されている[27]．

2.7. 山下憲治

1934年に来台した山下憲治は，（台北帝大医学部耳鼻喉科の上村教室に対して）医専の方で赤十字病院耳鼻咽喉科をリードし，1936年に山下教室を作った．戦後斯科の初代主任で，初の台湾人主任でもある林天賜も世話になったという[28]．山下は『台湾医学会雑誌』で数多くの論著を発表している[29]．

2.8. 結び

各主任の足跡を比較すると，初代主任の岸のように資料が日台ともに多く残されている人もあれば，加納のように影が薄い人もある．岸はその個人の趣向により，台湾から日本内地に戻った後，医学から乖離したが，台湾滞在中の現地調査の結果を含め，『台湾医学会雑誌』などで数多くの研究発表を残し，台湾の医学界に大きく貢献したと言える．他の6人もいずれも『台湾医学会雑誌』などで研究成果を示し，台湾の耳鼻咽喉科の発展に力を奉げた．特に最後の上村と山下は台湾人弟子によりエピソードなどを生き生きと伝えられている．

7人の主任が各資料に提示されている様子をまとめると，表1のようになる．

3. おわりに

台湾における現代西洋医療体系の構築は，19

世紀末に日本人によって着手されたものである．その流れの中で，耳鼻咽喉科という診療科は，日本でも台湾でも20世紀初頭に確立された．台湾の場合は，最初の40数年の間，主に7人の日本人主任のもとで発展してきた．本稿は，日台多くの資料に基づき，台湾の耳鼻咽喉科に大きく影響を与えたにも関わらず，きちんと整理されてこなかったこれらの日本人の足跡を辿った．台湾における耳鼻咽喉科の源流の部分を補充したばかりでなく，日本における耳鼻咽喉科の一環としても位置付けられたと思われる．

注

1）日本耳鼻咽喉科学会 http://www.jibika.or.jp/about/enkaku/enkaku_01.html．東京慈恵医科大学耳鼻咽喉科学教室 http://www.jikei-ent.com/job/history.html．『台大医院壱百年』（1995: 81）など．

2）台北帝国大学の前身である．

3）台湾大学医学部に教学単位の耳鼻咽喉科がある他，付属病院の耳鼻咽喉科もある．以下一括して「台湾大学耳鼻咽喉科」とする．

4）実際の肩書きは「医長」「科長」などがあるが，本稿では固有名詞でない場合は「主任」で統一する．

5）両科のホームページについての調査時間はいずれも2008年4月下旬である．

6）しかし，台湾大学耳鼻咽喉科のホームページと『台大医院壱百年』（1995: 84）では台湾医学会が成立されたのは1903年とされており，間違っている．

7）台湾大学医学部医学学科のホームページ http://www.med.ntu.edu.tw/main.php?Page=A4B2 では1928年に台北帝国大学が成立，医学部が台北帝国大学に編入されるようになった，と述べているが，簡略しすぎる．

8）台湾大学医学部付属病院 http://ntuh.mc.ntu.edu.tw/E-Hospital/NTUH.HTM．また，『台大医学院百年院史（下）系科所史』（1999: 120）でもほぼ同じ内容となっている．

9）戦後台湾の耳鼻咽喉科に多大な影響を与えている台湾大学耳鼻咽喉科の詳細は楊編（1989）が詳しい．

10）『台大医院壱百年』（1995: 81）に「加納芳澤」となっており，間違っている．

11）『台湾日日新報』（1902年1月23日）．

12）『台湾日日新報』（1903年3月4日，11月12日，12月20日，1904年10月26日など）．

13）『台湾日日新報』（1903年5月2日），『台湾日日新報』（1903年9月4日）．ちなみに，台湾大学耳鼻咽喉科のホームページでは“脳膜炎”を第一回医学会の宿題報告として，耳鼻咽喉科の部分は岸が担当して報告したとあるが，実際にそれより早い1902年第4期の『台湾医学会雑誌』に岸の「音響感受ニ関スル余ガ学説」の抄録が「台北本会記事」として残されている．

14）『台湾日日新報』（1906年7月6日）．

15）同じ日（1907年2月3日）の『台湾日日新報』にも同じ内容の「岸医学博士　休職医院長医学博士岸一太氏は台湾地方病及伝染病調査会委員を免ぜられる」が見られる．

16）岸が亡くなる前の三年である1934年10月7日の『台湾日日新報』に「岸一太氏は近く帰宅を許されん精神病者と鑑定さる」の記事が掲載されている．

17）日本耳鼻咽喉科学会（http://www.jibika.or.jp/about/enkaku/enkaku_01.html3）．

18）http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B4%B0%E8%B0%B7%E9%9B%84%E5%A4%AA では1912年（台湾総督府医院医長兼台湾総督府医学専門学校教授）とされているが，1920年3月5日の『台湾日日新報』には「細谷氏任命　細谷雄太任台湾総督府医学専門学校教諭兼同府医院医長」とある．

19）1922年千葉医学専門学校附属病院嘱託・文部省在外研究員として，アメリカ，イギリス，ドイツへ留学，1924年千葉医科大学附属病院耳鼻咽喉科医長・文部省在外研究員として，スイス，イタリアへ留学，1928年東京同愛記念病院・国立埼玉病院勤務，1945年埼玉県志木市にて開業したという（http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B4%B0%E8%B0%B7%E9%9B%84%E5%A4%AA）．ちなみに，千葉大学医学部耳鼻咽喉科学教室史（http://orl-web2.m.chiba-u.jp/htm/2-enkaku.htm）に提示されている歴代教授の中に「細谷雄太　大13.4～昭3.10」との記載が見られる．期間中の1926年11月26日の『台湾日日新報』に「医学大会に出席の為め千葉医大教授細谷雄太……が二十五日入港の因幡丸で來台した」ということが記録されている．

20）『台湾医学会雑誌』に見られる杉山栄の論著は「台北医院耳鼻咽喉科」の（1914年，1920年）と，「日赤台湾支部医院」（1921年）のがある．

21）前掲記事（1938年3月23日の『台湾日日新報』に「医学部の新陣容　六つの講座を新設」）など．

22）『台湾日日新報』（1928年5月16日）．

23）『台湾医学会雑誌』で見られる1938年以前の上村の論文の肩書きは，「台湾総督府台北医学専門学校耳鼻咽喉科教室」（1928年），「台北医学専門学校耳鼻咽喉科教室」（1933年），「台北医専」（1934年），「医専教室」（1934年），「教室」（1935年），「医専教室」（1935年），「台北医学専門学校耳鼻咽喉科教室」（1936年），「台北帝大付属医学専門部耳鼻科教室」（1936年）となっている．

24）楊編（1989: 8）．

25）たとえば1927年3月9日の『台湾日日新報』に「台湾総督府医学専門学校教授　上村親一郎京都府下及

福岡，岡山の二県下へ出張を命す」という「台湾総督府辞令」が見られる．また，1932年7月11日の『台湾日日新報』に「台北赤十字医院耳鼻咽喉科医長上村親一郎氏が一年半の洋行から帰台した」とある．

26）戦後二代目の主任でもある．

27）『台大医院百年懐旧』（1995: 22〜23），楊編（1999: 37, 20）など．

28）楊編（1989: 25）．

29）『台湾医学会雑誌』で見られた山下の肩書きは「台湾總督府台北医院耳鼻喉咽科医長，医学博士」（1936年），「台湾總督府台北医院医長兼台北帝大付属医学専門教授」（1936年），「台湾總督府台北医院耳鼻科医長（教授）」（1937年），「台湾總督府台北医院耳鼻咽喉科（教授）」（1937年），「台湾總督府台北医院耳鼻咽喉科長（教授）」（1937年）となっており，そして1938年より「台北帝大付属医学専門部耳鼻咽喉科教室」（1938年），「台大専門部耳鼻科教室」（1940年），「台北帝国大学付属医学専門部耳鼻咽喉科教室〈主任山下憲治教授〉」（1944年）が見られるようになった．

参考文献

読売新聞社『読売新聞』（原版1894〜1945年，CD-ROM，1999年〜2002年）

台湾日日新報社『台湾日日新報』（原本1898〜1944年，影印本，1995年，五南出版）

台湾医学会『台湾医学会雑誌』（原本1902〜1945年）

『太陽コーパス』（原版1895〜1928年，博文館）

『漢文台湾日日新報』（原版1905〜1911年）

『台湾日誌』（原版1894〜1945年）

『台湾人物誌』（原版1894〜1945年）

楊怡和（総編輯）『台大耳鼻喉科五十週年紀念』1989年

国立台湾大学医学院付設医院『台大医院壱百年』1995年

国立台湾大学医学院付設医院『台大医院百年懐旧』1995年

林吉崇『台大医学院百年院史（上）日治時期（1897–1945年）』1997年

台大医学院百年院史編輯小組編輯『台大医学院百年院史（下）系科所史』1999年

紙幅の都合で文中に言及されているホームページのサイトは再掲しない．